

❀ 琴ノ浦温山荘園の調査から

2008年度に調査をおこなった琴ノ浦温山荘園（和歌山県海南市）は、製革業で成功した近代の実業家・新田長次郎の旧別荘です。庭園は、長次郎が大正元年から工事に着手し、主屋、茶室などの建造物を建設しつつ、昭和初期に完成に至りました。

敷地の中央に位置する主屋は、建築家・木子七郎によって設計され、複数棟を雁行型に接続した当時の別荘建築の典型的な方法を採用しています。

庭園は黒江湾に面して築造され、潮の干満によって水位が変動する池を、主屋の東と西に設けた「潮入の庭」とする点に特徴がみられます。

特に本庭園で際立った特色は、飛石、景石、池泉護岸、階段土留め縁石、庭園家具などにモルタル製の擬石・擬木を大量に用いていることです。驚くのはその量的な多さだけでなく、「大石を人工製作せむと思ひ立ち、セメントを以て試作せるに一見本物の自然石と異ならざるもの出来上がり自ら興趣を湧かしめた」と自叙伝にあるように、長次郎自身はその製作をおこなっていたことです。現在の擬石や擬木といえば、大量生産型のものばかりで味も素っ気ありませんが、長次郎はハンドメイドで丹念に製作し、本物の石と見分けがつかないくらい、きわめて写實的に模造しています。園内には紀州青石を模造したものもあり、石英が脈状に結晶した様子も造作している点は、ただ感服するだけです。

近年、わが国の名勝保護行政では当面して保護の措置を講ずべき庭園として「新しい時代の庭園」が挙げられ、また「登録記念物」としても保護措置を講ずることが可能となりました。今回の温山荘園のように、近代庭園に関する調査の必要性は今後ますます高まることでしょう。（文化遺産部 粟野 隆）



庭園池泉の擬石護岸と雪見灯籠